
桜、さくら

時鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜、さくら

【Nコード】

N3108K

【作者名】

時鳥

【あらすじ】

僕は逃げてきた。

そんな僕を引き戻したのは小さな桜の花びら……。

僕は思い出す。

忘れてしまいたかったことを。それでも、本当は覚えておかなくちゃならないことを。

まだ少し夜は肌寒い。

それでも、明るい街灯が足早に家へ帰る人混みを照らし出していた。

たくさんの方は僕を避けて無視して歩いていく。

皆、顔がないように見えた。

いいや、それだけじゃない。僕の視界にはあるはずの色も無く、全てが灰色でぼやけてた。

こんなに人が流れているのに僕はただ一人。突っ立っているような、そんな感覚。

ゆっくりと灰色の人ごみから寒空へ視線を向ける。無数の星が街灯に負けないよう強く強く光っていた。

ふと、込み上げるはずのない悲しみが僕の胸をいっぱいにする。

僕は逃げてきたのに……。

逃げてニゲテ逃げて……………。

苦しみから逃げたはずなのに。

悲しくて息苦しかった。呼吸を精一杯してるはずなのに、空気がそこに無かったんだ。

星の輝きが眩しすぎて、僕は視線を下に落とす。

行き交う人々の足音は僕をすり抜けて、僕がこの場に存在しないかのような感覚を覚えさせられる。

悲しくて寂しくてやるせ無くて。

どうしたら良いか判らず下を向いたまま視線を泳がせた。自分の靴に目がとまる。

其所には一片の花びらが。

赤を凄く薄く薄く淡くした色が。

灰色に辺りを移していた僕の瞳に飛込んできた。

……桜……。

そう判るまで十を超える時間がかかった。

他のモノは色褪せて灰色にしか見えないのに、何でこれだけ鮮明に色も形も判ってしまうんだろう？

悲しみはこれにあるのに……。

そっと、ゆっくり壊さないようにその桜の花びらを手に取る。

悲しいのに……

何故か暖かった。

ふんわりと僕を包み込むようで。

僕の周りにだけ色が戻ったような気がした。

桜、桜……散る姿は美しく暗い夜空に映えるその姿は妖しくさえある。

その桜が僕に悲しみを与える。

何故……？

判らなかった。

悲しいことは判るのに……。

逃げてきたことは判るのに。

この桜が今の現状の全ての根元だと判るのになのに……

判らなかった。

思い出せなかった。

まるで逃げる途中に一つ一つ落としてきてしまったように……判らなかった。

振り向けば其所は来た道。

行ったり来たり人がしているはずなのに、その先は暗い恐ろしささえ感じる闇のように思えた。全てが吸い込まれてしまうような気さえした。

ただひたすらに暗闇を眺める。

戻ってはならないと心の隅で誰かが言った。

逃げると、振り返るなと僕に言う。

だけれど……

また別の誰かが戻れと言う。

今戻れば間に合うと、逃げたことにはならないのだと、そっと僕に囁いた。

暗闇を見つめ足を一步おそるおそる前に出す。

地を離れた足。

微かに思い出した。

それは……誰の足？

その足の主が知りたくて僕はもう一步足を進めた。

「ね、りよう君。桜の木は私の木よ。同じ名前だから」

優しい声。

暖かい日差しのような、僕を包み込んでくれるような声。

貴方は誰？

気になって、また一步また一步と闇の中へと歩みを進めた。少しづつ思い出されてくる。優しかったあの人のことを。

「だから私が居なくなったら、あの桜の精になるのよ」

無邪気な笑顔。

明るくて眩しくて大好きだった。

手を降って泣きそうになりながら僕を見送る貴方。そうだ。

僕はあの人の元から離れた。

そして……垂れ下がる、腕。

もう少し。

もう少しで全部を思い出せそうだ。

ふと周りを見ると、もう既に人混みは無かった。

何処かの家の庭先にぼつんと一人立っていた。

何処か……いや、此処はあの人の家。

庭には一本大きな桜の木があった。

そう、手にした花びらの元。

満開の桜の木。

その木の根本には横倒しになった椅子が一つ。

今はもう無い。

けれどあの時は在った。

倒れた椅子。地を離れた足。ぶらりと垂れ下がった腕。

もがき苦しんだように首には爪の痕が無数に……。

「……………母さん……………」

苦しくなつて、その場に膝を付き屈み込む。

そうだ。思い出した。

あの人は僕を産んで育ててくれた人。

優しくて綺麗で大好きだった……母。

さくら、それが彼女の名前。

全てを思い出すと同時に吐気と、そして逃げ出したい気持ちに駆ら

れる。

そう……。

認めたくなくて……。

みとめたくなくて。

何度この場から逃げ出しただろう。

受け入れられなくて……。

それでも戻ってきた。

忘れられなくて、思い出した。

母さん……何で？

判らなかつた。

居なくなってしまう理由が判らなかつた。

自ら、もう二度と会えない場所へ彼女は歩を進めたのだ。
理解できなかった。

声さえも届かない場所へあの人が行ってしまったことが。

この桜の木の根本に、母は眠る。

そつと母が眠っているはずの場所に触れる。

感じるのは土の感触だけで何の温もりもない。

カサツ――

桜の木の根本。

其所に微かに土に埋もれた紙切れがあつた。

僕の手に触れ音をたてたんだ。

紙切れには文字が書いてあつた。

まるで遺書のように文字は書き列ねてあつた。彼女の字で。

――りよう君へ。

この手紙が貴方に渡ることを願って。

貴方がこの家を出ていつから数年の月日が流れていきました。
会えないことが酷く寂しい。

子離れが出来てないと周りは言うかもしれませんが。
それでも子を想わない親は居ないのです。

私は、先刻、病院の医師から先が永く無いと言われました。
癌だそうです。

詳しいことは頭をすり抜けて行ってしまっ覚えていません。
ただ判るのは貴方がこの場所に戻ってくるまで私が生きていられ
ないと言っただけでした。

死体で貴方と再会しても私は喋ることが出来ない、そういうこ
とだけが判りました。

同じ喋れないのなら私は桜になります。

桜となって私は、ずっと貴方をこの庭で待ち続けます。

そして、見守り続けます。

ですから、悲観はなさらないで。

桜の木が私なのだから。

いつでも、会う、ことが出来るのですから。

愛しい我が子へ。

母、さくらより。――

「……………あ……………さん。……………母さん……………っ……………」

紙切れに水滴が落ち、其所だけ色が変わる。

頬を伝って流れる滴の感触は、酷く胸をいっぱいにした。

貴方は、僕を待ったために残りわずかな寿命を自分の手で断ち切っ

たと言うのですか？

桜の木の下で命を断てば桜になれると信じきって……。

とめど無く溢れる涙。

胸はいっぱいでいっぱい……口からは嗚咽しか吐き出せない。

桜の花びらががちりちりりと優しく僕の上を舞う。

まるで悲しまないでと言っているようで……。

優しい桜。

僕は此処に居ます。

貴方をもう置いて行ったりはしません。

貴方を待たせたりはしません。

ずっとずっと側に居ます。

親が子を想うほど子も親を想うのですから……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3108k/>

桜、さくら

2010年10月8日15時04分発行